

葛谷栄一の 異見 私見



供しながら、耕作放棄地を活用しての農業を後押ししている。自らが高知等へ出かけて不在の間は作業を委託することにより現金収入が確保できる仕組みとする等により、5年後には年収500万円を見据すビジネスモデルも作成して新規就農者の自立をリードしている。

荻原君は高知でサ-

「サーフィン」しながら「百笑」でできる農業

何とかの一つぼほえのよに「農業所得の倍増」ばかりが声高に叫ばれ、所得向上にあまり熱心とはいえない。農業者は時代遅れ、経営意識が欠如しており、こうした農業者ではこれから先の日本農業を任せることはできないという風潮が濃厚に作りあげられつつある。

こうした中でチームサーフィンや「サーフ&チーム」をキーワードに、「所得(資本)だけでなく、もっと大事なものを守り、「光をしっかりと見つけながら取り組む農業を目指している若者に出会った。山梨県甲州市勝沼のブドウ農家の5代目である荻原慎介君(30歳)である。山梨でのブドウの収穫は7月下旬から始まり10月中旬ごろまで続くが、収穫作業が一段落すると高知に飛んで生姜を生産している。付け加えられるのは彼は北海道、パルプ工場から排出される温水を使つてのブドウの温室栽培の指導にもあたっており、一地域という以上に多地域居住型の農業に取り組んでいる。

併行して自ら甲州市にシェアハウスを設け、就農を希望する都会の若者に住まいを提

フィンを楽しんでいる。だが、彼のキーワードとする「サーフィン」は「ネットサーフィン」からきているらしい。ウェブページを閲覧するにあたって、興味のあるままに次々とページを閲覧していくことを「ネットサーフィン」というが、多様なチーム(農業)をサーフィンしよう(味わおう)ということのようだ。すなわち農業はその土地の気候、地質、水質、人の気質等の複合体であり、だからこそそだけの真文

化、景観、生活習慣、風習等が存在するといものが基本的な農業観となっている。またこれに関連して強調するのが「ローカルt.o.ローカル」だ。知り合ただけでは「ローカルt.o.ローカル」にすぎないが、もっと深い関係になる、なろうとする「ローカルt.o.ローカル」になってこそ、その根底にある大事なものが見えてくるのではないかと、という。

農業のおもしろさ、醍醐味は、その地域性・地域資源を「再発見」しながら、これを生かして楽しむというところにこそあるといことなのであろう。まさに多地域居住型の農業に取り組んできたからこそ獲得可能な認識のよにも感じる。そして「面白く楽しくやる」ことが一番、儲けは次に語るのと同時に「乗るのが本当の百姓」だという話は深く共感するところである。本来は百姓だからこそ「百笑える人生」を送ることが可能なのであり、百姓が「百笑」になつてこそ日本農業の再生につながるということになる。

結果的に地域を離れし「金だけ、自分だけ」という農業者を増やしかねない農政がすめられつつある中、こうした若者との出会いにはほっとさせられるものがある。そしてこうした若者たちこそあたらしい時代を切り拓いていくにはと願わずにはいられない。(農的社会学サイ-研究所代表)